

車椅子からの 出発

鹿島とも子



車椅子からの出発

一九八九年七月三十一日

初版発行

著者 鹿島とも子

発行者 長谷川正承

発行所 株式会社鎌倉書房

〒一六二東京都新宿区市谷左内町二一

電話(〇三)二六八一三〇六(販売部)

二六八一四五二二(編集部)

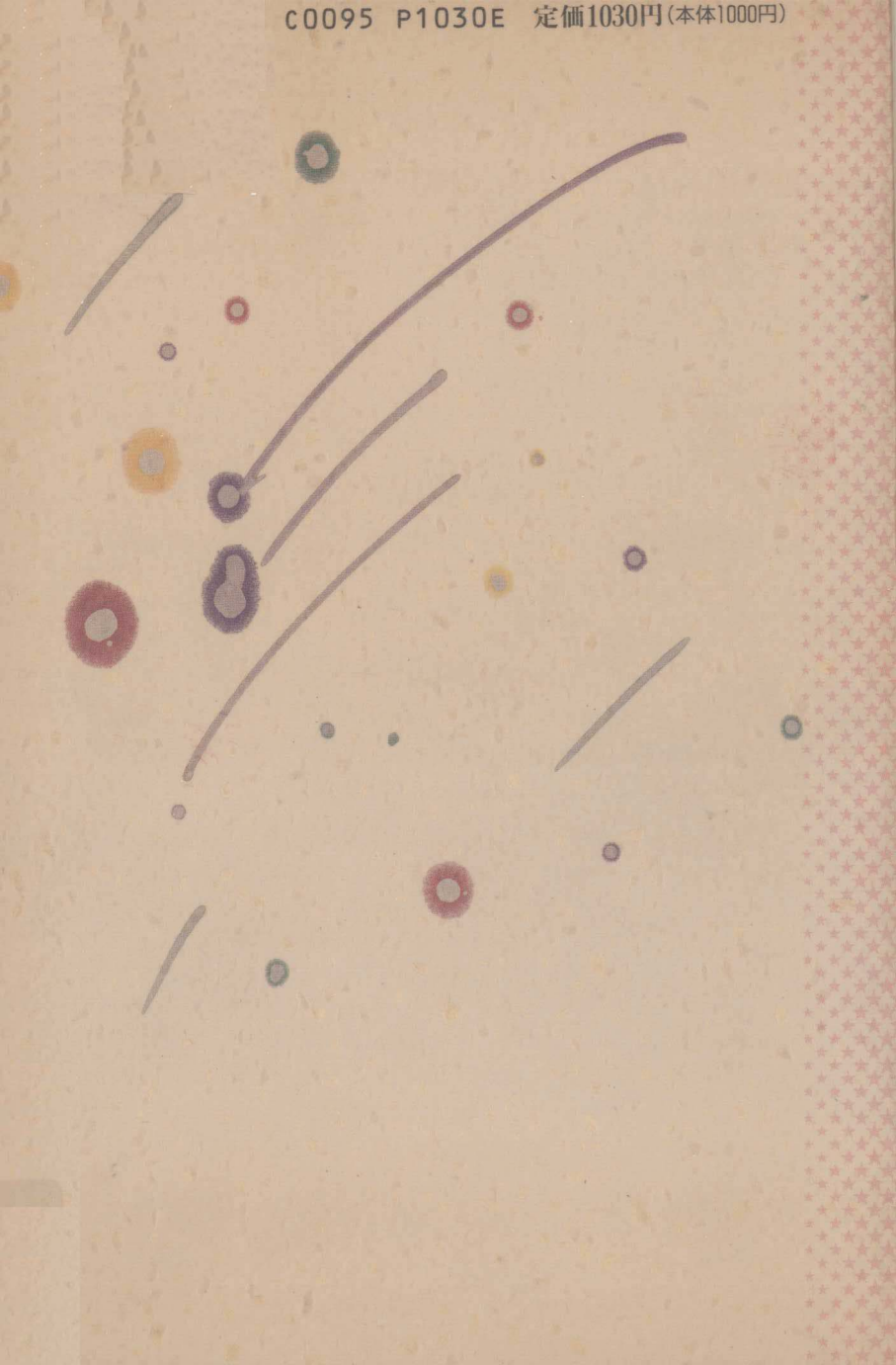
印刷 株式会社精興社

製本 共同製本株式会社

車椅子からの 出発

鹿島とも子





車椅子からの出発

一九八九年七月三十一日

初版発行

著者——鹿島とも子

発行者——長谷川正承

発行所——株式会社鎌倉書房

〒一六二東京都新宿区市谷左内町二一

電話(〇三)二六八―二三〇六(販売部)

二六八―四五二二(編集部)

印刷——株式会社精興社

製本——共同製本株式会社

© 1989 Tomoko Kashima
ISBN 4-308-00463-2

車椅子からの出発
ち 鹿島とも子

車椅子からの出発

目次

目次

悪夢の事故	9
スポットライトの中へ	10
足が無い！	14
夜のドライブ	19
スキー場の朝	24
雪の長岡	31
おびえた絵奈	32
強い絆	36
日赤入院	41
かけがえのない友人	44
長い夜	49
父のお土産	56
慶応病院	61
慶応への転院	62
母の見舞い	65

十時間の手術	70
手鏡の中の春	75
慰めに満ちた瞳	80
ビバちゃんと陽子ちゃん	84
苦い涙	88
日劇入団	93
父と娘	94
日劇二十八期生の誕生	101
あっ、パパがいる	106
リハビリの開始	109
自分の足で歩きたい	110
リハビリ日記	115
待ちかねた退院	131
症状固定	137
人の視線が怖い	138
症状固定	146
ダンスが踊れない	151

あとがき	245
コルドン・ブルー	242
再起に向けて	231
理事長の白いハンカチ	223
隆光学園の歌	217
大阪からの手紙	214
出発ちの歌	213
泥だらけの育児	208
リキとの別れ	201
出産	194
不安の黒い影	190
命の芽生え	180
雄一の誕生	179
和解	175
証言	165
賠償請求	160
告訴	159

惡夢の事故

スポットライトの中へ

赤坂、コルドン・ブルー。

一九八八年八月一日午後七時三十分。

開演まであと三十分。少しずつ緊張が高まっていく。鏡の中の顔が心なしかひきつれ、紅筆を持つ手が小刻みに震える。

落ち着かなければ。

二度の通し稽古はとどこおりなく済んでいる。あんなに苦勞して、覚えても覚えても頭の中をすりぬけてしまっていた歌詞が、今ではおとなしく収まって出を待っている。さあ、深呼吸をひとつ。大丈夫、と自分にいい聞かせてみるが、体の奥のほうから抑えようもなく震えが湧き出してくる。

「とも子さん、以前は本番が近づいてくると目が血走って、ぴりぴりして、すごく緊張してるなってわかったけど、今度は違うわね。さすがに年の功っていうところ」

一緒に舞台に立つ同僚のダンサー、ジュラちゃんの言葉が、私の気持ちをほぐし励まして

くれる。

ええそうだわ。確かにあの頃は自分をよく見せたい、そんな自意識でいっぱい。舞台が近づいてくると自分でもわかるほど、いつでもあがっていたわ。でも今日はちがう。この胸の鼓動はあがっているためではないわ。うれしさのあまり、幸せのあまり高鳴っているんだわ。うれしくて幸せで、できるならば大きな声でありがとうって、私のまわりのすべての人に向かって感謝の言葉を叫びたいくらい。その高揚した気持ち私の体を震えさせるんだわ。

長い空白だった。

出口のほの明かりさえみえない見知らぬ暗いトンネル。どこまで続いているかわからない真っ暗な長いトンネルを手探りで進む心細さに、いったいなんどくじけそうになったことか。もういやっと、なにもかも放り出したいと考えたことがどれほどあったことか。眠れぬ夜、絶望と不安の涙をどれだけ流したことか。目の前にどこまでも続くと信じて疑ったこともなかった私の進むべき道、踊り手としての道が、ぶつりと断ち切れ奈落の底へ突き落とされてしまったあの日から。

鏡に向かって深く息を吸いこみ、ゆっくり丁寧に化粧を続ける。アイラインをくっきりと引き、シャドウを効かせて。輪郭も鮮やかに描いた唇が、赤く濡れて光っている。かるくカールした後れ毛が一筋、光の中に浮かび上がってキラめいている。鏡の中の顔は、自信に

あふれにこやかに微笑んで空白の時間を飛び越えている。

さあ、背筋をしゃんと伸ばして。

「もうすぐ時間です。下に降りていきましょうか。着替えもしなければならぬし」

今日のために忙しい後藤組の劇団の振り付けを休んで、手伝ってくれている土屋智子ちゃんの声を合図に、私は立ち上がりドアのノブに手をかける。

開演の準備でざわめいていた舞台裏が、目に見えない糸に少しづつ少しづつ引き絞られていくように、次第に物音を消し、緊張した密度の濃い雰囲気支配されていく。

このびりりと引き締まった空気が私は好き。自然に背筋が伸びていくような高まりきったこの緊張感。じっと息を潜めておさえにおさええた感情を爆発させる瞬間を待つ、このわずかな時間を、どんなに恋しく思ってきたことだろう。この場に再び立つことのできた今、そのことが痛いほどよくわかる。

オーブニングのドレスは、ラテンナンバーに合わせて彩りも鮮やかな花柄のプリント。フリルを何段にも重ねたスカートの裾は、斜めにカットされて右足の太腿を大胆に露出させている。

つばの広い真白な帽子をかぶり、レースの手袋をはめる。

私は今、南米の焼けつく太陽の下に立ち、熱い血を秘めて誇らかに胸を張る一人の女。体

の底から湧き起こるリズムが、抑えようもなく口をついて出る、情熱の女。

八時。さあ、出の合図。カーテンが上がる。

気負いも緊張もすべてが溶け去って、流れる音楽と喜びとに全身を委ね、拍手とスポットライトの中へ、私を待つお客さまの前へと、最初の一步を踏み出す。

じっと耐え、待ちに待った最初の一步を。

足が無い！

「足が無い！」

下半身の感覚を一切奪われた私には、ひきちぎられた両足から激しい勢いで血が流れ出している、どくどくという音が聞こえるような気がしました。どんな痛みにもまして耐え難いその感覚で、墜落の衝撃から我に返ったようです。体中から血の気が引いていくような驚き。ダンサーの命、なによりも大切な足が……。

はっとあたりを見回した私の目に映ったのは、しみひとつなく輝く、まばゆい雪の白さばかり。どこにも血の、あの鮮やかな緋色は見当たりません。

「よかった、ちゃんとしているんだわ」

自分がどんな状態におかれているか、とっさに判断はつかなかったものの、立木に激しい勢いでぶつかった時の、バキッというぞっとするような音が耳の中に渦巻いているようにでした。それでもまだ、痛みはなかったのです。

どうしたの、なにが起こったの。混乱し、動転していたにもかかわらず、頭の一部はしん

と静まって、足がちゃんとついていることに安堵する気持ちもありました。

ひんやりと冷たく、なぜか心地良くさえあった雪の上にじっと横たわったまま目を上げると、現実のものとは思えぬほど澄みきった、ふかぶかとした空の青さがありました。やがて、その青さは圧倒的な質量となり、私の上にのしかかってきます。まるで水の底に身を潜める魚のように自分が感じられ、枯れた枝を空に向かって指し伸べる木々のシルエットが、ゆめく水草のように私を取り囲んできます。耳の奥がつんと痛くなる、音を吸いつくした静寂が、私を眠りの中へと誘い込もうとしています。

いけない、雪の中で眠ったら死んでしまう。しっかりしなくては。

ふいに死の恐怖に襲われて、はじめて叫び声を上げました。

一九八二年一月二十四日のことでした。

スノーモービルの競技会のレディーススコナーにデモンストレーションで出演してくれないか、という依頼を受けた時、迷うまでもなくすぐお断りするつもりでした。それまで一度もスキーをしたことがなかったし、怪我するのがなによりも怖かったからです。

振り付けの小井戸先生にも、

「事故でも起きたらどうするんだ。やめなさい」